

知的障害の不可視性が障害の自己認識の形成にもたらす影響 — 知的障害のある人の語りに基づく一考察 —

杉田 穂子

〔キーワード〕 知的障害のある人の語り, 社会モデル, 障害の自己認識, 他者の存在, 障害の不可視性

1. 研究目的

本研究は、知的障害のある人が、家族・社会から、どのような取り扱いを受け、その経験をどのように受け止め、自己認識を形成してきたのかを、知的障害のある人本人の人生の語りから学ぼうとする研究の一環で、そのような研究の必要性については拙稿（杉田，2011）で述べている。

本論文では、40代になるまで自分の知的障害を認識していなかった2名の語りと自分の知的障害を認識していた別の1名の語りに焦点をあて、障害の不可視性が知的障害のある人の障害の自己認識の形成にもたらす影響について考えていきたい。

2. 研究の視座：障害の可視性、不可視性

本論文では、社会モデルの考え方に基づき障害をとらえている。社会モデルとは、1970年代後半、英国の身体障害者団体から提起された考え方で、障害をインペアメントという個人的次元とディスアビリティという社会的次元に引き離し、問題の責任を障害者個人に帰するのではなく、社会的に形成される抑圧や差別や障壁といったディスアビリティの社会的責任を追及していこうというものである（杉野 2007, 116-7）。ここで強調しておきたいことは、社会モデルでは、暗黙の前提としてインペアメントが認識可能とされていることである。

ところが、障害の中には、認識され易いもの、されにくいものがある。例えば車椅子や白杖を使用している人を見れば、下肢や視覚に障害があるとわかる。ゴッフマンは、「スティグマの可視性」について「ある人がスティグマを持っていることを〔他人に〕告知する手がかりがスティグマそのものにどの程度備わっているか」（Goffman 1963 = 石黒 2001, 88-90）と述べている。本論文では、ゴッフマンが「スティグマの可視性」に言及したことに倣い、このような障害を「可視性の障害」とよびたい。勿論、可視性か不可視性かは単純には分けられない。車椅子を使用している人も一次的な怪我かもしれない。精神障害の症状は、ある時期にはわかるが寛解期にはわからないし、吃音は、すれ違っただけではわからないが話をするとうわかるだろう。このように考えると可視性か不可視性かは、明確に分けられるというよりは、連続性をもったものとしてとらえることができる。

この文脈の中で、知的障害の社会的特性のひとつは、「不可視性」にあるといえる。それは

第一に知的障害は、インペアメントを目で確かめることができないからである。第二に知的障害のある人は、他の人ができていることが、時期をずらしてできるようになるからである。例えば1歳半になって発語がみられない子どもも3歳を過ぎると話しだすなどである。

本論文で取り扱うテーマは障害の自己認識である。ある人が自分の障害についてどのように認識するかがテーマである。可視性の障害であれば、他者と同様、本人にもわかり易い。生まれつき下肢がない子どもは、幼稚園などの社会にいれば、歩いている同年齢児と自分を比べ、自分のインペアメントを認識し、社会からの抑圧に絶望することもあるだろうが、戦略を立てて対処していくことができる。なお、ここでいう戦略とは、自己に関する重要な情報を管理/操作するに際して使う手法のことをさす (Goffman 1963 = 石黒 2001, 157)。

では、軽度知的障害の場合はどうだろうか。保育場面で軽度知的障害のある子どもは「あれができない」「これがわからない」という場面を経験する。しかしなぜ自分だけができないのか、わからないのか、その原因を目で確かめることはできない。また時期をずらしてできるようになる場合もあるが、なぜ自分はできるようになったのかの原因も本人には自明ではない。つまり、本人はインペアメントを認識することが困難なので、その結果生じる社会からの抑圧に対して戦略を立てることも困難なのである。

さらに親はどうだろうか。生まれた子どもに身体障害がある場合、親は大きなショックを受けるが、そのようなインペアメントをもった子どもと共に生きていく戦略を早期から模索することができる。一方で、軽度知的障害のある子どもの親の障害認識は複雑である。不可視性のため、見た目にはわからないし、できなかったことも時期をずらしてできるようになれば、親は子どもの知的な弱さを認識していても、それを障害と認めない場合や、社会や本人に対して障害を隠そうとする場合もあるだろう (中田, 2002, 70-4)。そうなればさらに本人の障害認識の形成は困難になるだろう。

本論文では、このような軽度知的障害の不可視性が障害の自己認識の形成にもたらす影響について考えていきたい。

3. 研究の方法・手順および対象

方法・手順は、ある通過型知的障害者入所施設（以下X施設とする）の現在および過去の利用者のうち言語的なコミュニケーションが可能な人を施設職員に挙げてもらい、同職員を通じて研究目的での面接の了承を得た。その後、面接協力者の生活の様子を見学し、再度直接面接の依頼をした。了承が得られた人に対して、後日職員の立ち会いなしで個別に面接を行った。面接時には、小さい時の出来事、学齢期、学校教育を終了してからのこと、施設を利用した動機、利用してから現在までの生活、自分の障害、将来の夢について、自由に話してもらった。面接は一人当たり30分から2時間を要した。必要があった場合には再度面接を依頼した人もいた。了解を得た人の面接は録音し、逐語録に起こした。得られなかった人は、メモをとりながら話を聞き、直後に記録に残した。

対象は、面接承諾が得られた18名である。本論文では、そのうち知的障害の自己認識がな

表-1 分析対象者

	性別	年齢	愛の手帳の区分
Aさん	女性	40代	4
Bさん	男性	40代	4
Cさん	男性	20代	4

かった2名と認識のあった1名の計3名（表-1）を対象とし、障害の不可視性が障害の自己認識の形成にもたらす影響について考えていきたい。表-1に示すように、3名とも愛の手帳は4度で知的障害の程度は軽度であった。

倫理的配慮として、名前は表に出さないことを本人たちに約束し、本論文の発表に際し、施設職員を通して再び本人たちの了解を得た。

4. 結果と考察

(1)知的障害の自己認識がなかったAさん、Bさんの語り（表-2、表-3）

①学齢期

一般に障害の認識への家族・本人と社会のずれは、就学時の健康診断で特別支援学級・学校（2007年以前は障害児学級、養護学校という名称であったが、本論文では特別支援学級・学校を用いる）を勧められる時に現れることが多い。しかしAさんもBさんも軽度でこのずれは現れなかったのだろう。小・中・高校共に普通学級に通っている。2人は小・中学校時代を次のように語っている。

Aさん:校庭とか……広かったですね。友達も……いました。……中学校もよかったです。たくさん友達できて。普通学級です。(勉強は)……難しくなってきましたね。皆さんと、動物園に行ったり……話をいっぱいしたりしまして。

Bさん:よかった。……楽しかった。

これに対して可視的な軽度身体障害をもち、同様に普通学級に通った人たちの語りは対照的である。彼らの語りをまとめた研究によると、「学齢期初期は『楽しかった思い出ばかり』として記憶する」が、「中学校に入学すると、……『違い』の面ばかりが強調される関係性が作られる」（太田 2007）という。

小学校のときとか、中学校のときとか、……すごい自分の体のこと敏感やったと思う。足ってという言葉にぴっぴっぴ反応してん。机の脚、とか言っても、はっと自分のことかな、って反応したり、……（太田 2007）

表-2：Aさんの語り：女性，40代〔（ ）は補足。〔 〕は筆者の言葉〕

日中活動の場に何うと、小学生の算数ドリルの割り算を電卓を使ってやっている。挨拶すると丁寧に答えてくださる。インタビューは施設内のAさんの個室で行った。話す言葉は小さな声であるが、はっきりと聞き取れる。

〔幼児期〕

〇〇幼稚園です。……何か絵を描いたり……滑り台とかしたことが楽しかったですね。……友達もいましたし。

〔小学校〕

〇〇小学校です。……私学です。(どうしてその小学校に行ったか、分かりますか?) 行きたかったからです。校庭とか……広かったですね。友達も……いました……学級委員してた……4年の時です。……選ばれました。……うれしかったです。

〔中学校〕

〇〇中学校……です。中学校もよかったです。たくさんの友達ができて。普通学級です。(勉強は)……難しくなってきましたね。皆さんと、動物園に行ったり……話をいっぱいしたりしまして。(先生を覚えていますか?) 覚えています。〔何先生だったかしら?〕それは言えませんが……。

〔高校〕

〇〇高校というところに行きました。〔なぜ、〇〇高校に行ったんですか?〕……好きだったからです。……いろんな人がいましたから。〔どんな人がいたかしら?〕そうですね。……それは言えません。……仲良しさんが……できたんですね。……茶道部へ入ってた……楽しかったですよ、……普通学級ですよ。(先生も) 優しかったです。女の先生でした。

〔高卒後〕

高校卒業してからは、しばらくは家にいました。……家で、手伝いしてました。……母と料理したりしてました。散歩したりしてました。〔お母さんは〕優しい人でした。……勉強も教えてくれました。……父も優しいですよ。……ずっとうちにいましたね。(高校卒業してから) 20年ですね。……母と生活、暮らしていましたね。

〔母の入院〕

……急だったんですね。……(母が) 急に倒れたんです。〔びっくりしたでしょう〕はい。びっくりしました。……(母は)……入院してます。……今でも生きてるんですけども。……わたしが、娘だっていうことは、少し分かるみたいです。

〔入所のきっかけ〕

〔どうしてX施設に入るようになったのか、覚えていらっしゃいますか?〕……家では一人で、無理だったからです。……それまでは、うちで暮らしていました、……わたしと父です。……昼間は……おかず作りとか、……あとは、買い物とか、……(父は) 会社に行って……父が買い物をして、それで、二人でやってまして……何か、父が、難しいからと言って、ここへ入れて、入ったんです。……本当は嫌でした。……いつまでも父と暮らしたかったですね。〔それは言いましたか?〕はい。言いました。〔そしたら、お父さんは何て?〕そしたら、うん。笑ってました。……(時々) 帰りますね。こないだ帰りました。……帰ったら、……自分のおかず作りをしたり、……父の面倒をみたり、歯を磨いたり……洗面しますよ……洗濯もしたり、……あと、折り紙を折ったり、……いろいろと勉強しています。……(ここに入る時は) 父だけが見学に行きました。(私は) 来なかったです。……私はうちにいたかったからです。……来なくなかったからです。

〔現在の生活〕

一人になって、やっぱり、寂しいですね、夜は。……それと、ずっと父と母と暮らしていましたものね。……土日は、テレビを見たり……出掛けたり……してるんですね。(仕事は)……例えば毎日、計算とか。漢字とか、それからひらがなとか、……〔楽しいですか、お仕事は?〕楽しいです、仕事は。……〔Aさん、幸せそうですね。〕……う～ん。あんまり幸せではありませんけど。〔それはどうして?〕ここ来たからです。〔……そのまま、お父さんとお母さんと、暮らしていたかった。〕はい。暮らしていたかったですね。父と母と三人で。……(X施設に入って) 5年目です。

〔障害について〕

〔ここに入る時に、手帳……はとりました?〕はい。〔それはどう思われました、自分では?〕自分では、ちょっと、障害を持っています。〔障害を持っていますか?〕はい。4度ですけど。〔……いつごろから、そう思いましたか?〕……中学校も、いや高校の時は、思ってませんでした。〔思ってなかった。いつごろからかしら?〕う～んと。このごろです。……〔高校卒業して、お母さんとお父さんと楽しく暮らして来られましたね。急に障害のある人たちの、何か手帳をとったり、ここに入ったというのは、Aさんにとっては、どういうお気持ちでしたか?〕少し、嫌な気持ちでしたよね。……〔それ(障害について)は、誰かに説明されたんですか?〕……説明というか、……父に言われたんですね。この人にも、言われましたよ。……障害、知的がちょっとあるって言われました。うん。〔それで、びっくりした?〕びっくりしました。〔悲しくなりましたか?〕少し悲しくなりました。〔今はそのことを、どう思いますか?〕今でも少し悲しいです。

〔将来の夢〕

いろいろありますけども、……父と二人で暮らしていきたいと思います。……父と暮らせることが一番です、はい。〔ケアホームに……あんまり行きたくないですか?〕あんまり……行きたくありません。

表-3：Bさんの語り：男性，40代

日中活動では、掃除をするグループに加わってモップで床掃除をしていた。インタビューは施設の面接室で行う。薄い色のサングラスをかけている。話のテンポが早く、筆者の言葉もずれて解釈されることが度々あった。

【幼児期】

(幼稚園は) みんな優しくかったよ。……幼なじみがいたんです。……17のときに引っ越しちゃった。

【小学校】

よかった。……楽しかった。……図工にいたね、先生はものすごく嫌だった。……胃袋づかみするから……ぎゅーって。

【中学校】

おれが中学校のときね、ボクシング習ってたの。[どうしてやりたかったんですか?] いや、強くなりました。……うん。いじめられてた。いじめられてたから。小3から中3までいじめられた。5対1で殴られ、蹴られた。強くなるためにボクシングを習った。(中学) 卒業後も家までつけてきた……

【高校】

〇〇高校。楽しかった。[いじめられなかった?] うん。(勉強は) 難しかった。(高校は) ……就職するのに。……先生はいい人いたね。……〇〇〇〇っていう先生。……結構できない人にさ……まめにさ、丁寧に教えてくれた。

【高卒後】

卒業してすぐ、1カ月もしないうちに〇〇始めた。……1カ月に18万もらってた。[どうしてその会社に入ることにしたんですか?] ……親がやってた、おやじがやってた。……だから親は、就職してもね、いい就職とかね、ないから、それやったほうがいいじゃねえかってことでやり始めました。

【父の死・失職】

(父親は) 6年前に〇〇病で亡くなりました。……[どうして(仕事を) 辞めることになっちゃったのかしら] いや、わかんない。……母親は知ってると思うんだけどおれは知らない。……3年と半年家にいたから、……これじゃまずいと思って、ここに来ちゃったの。……20年間はそ仕事して、3年間家にいた。それで、家に閉じこもっちゃったの。

【入所のきっかけ】

……母親とかがね、おれが遊んでこんなことしてもしようがないんだよってことで、ここを紹介されたの。……[見学は?] 来ない、いきなり来た。……空いてるところへ入るさってことで入ったの。[入りたかった?] いや [どうして来たかしら?] わかんない。……[お母さんはどう言ってたの?] よかったねって。……すごく泣いたの。でもね、友達もできるしね、いるし。で、……今じゃもう。だからそう思えばいいんじゃないの。……うちの近所の人、知らないと思いますよ、ここで、ここにいるの。……そういう人(父親) が亡くなっちゃうと、いなくなっちゃうと、母親だけだから、やっぱり母親も嫌なんじゃないですか、仕事してないで遊んでられるの。……おやじが亡くなった後、仕事してなかったの。……だから〇〇さん(福祉事務所の人の名前)のそこへ入れられたんじゃない。[……家におられた時は(お母さんは) 働きなさいとかおっしゃったの?] うん。だからアルバイトニュース、アルバイトの本とか買って見てたけどね。[面接に行ったりは?] しましたよ。工場とかね。……でも、……目が悪いからね、入れなかったの。

【現在の生活】

おれ、クリーニング班だもん。……だから洗濯たたみとか掃除とか、人の部屋のね、……やったりするから、……これ(施設の仕事は)、楽ですよ、考えてみたら。……だって午前中2時間に、午後2時間、4時間しかやってないじゃん。おれがやってたとき、午前の8時から夕方5時か6時までやってたよ、仕事。して、昼休み1時間、うん。そう思えば楽だよ、ここね。

【障害について】

[愛の手帳とか取ったでしょう?] 愛の手帳は母親。[検査とか受けましたか?] 忘れた。……[それってというのはどう思う?] 別に。[そんなに嫌じゃなかった?] うん。だっておれの知ってる人でさ、〇〇っていう人も愛の手帳取るのに……苦労してるの……工場に勤めてるんだけど辞めさせられて、就職先が見つからないから、……ここに来たいって話なのね。……おれに会いたいらしいんだけど、高いんだって、……愛の手帳持てればバスも電車も安くなるから……[障害をもってるって言うふうには思われますか?] 思わない。……だっておれ、何ももってないもん。……普通の人と変わらないもん。……普通のそこら辺の人とかとね、職員と変わらないもん [ここで生活している人を見てどう思いますか] 変だと思う……[この施設に……入っていいですよって言われたのはショック?] 別に。……考えてない。……でも働く場所見つかってるんだから、何でもだいんのかと思って。……おれ、いる必要ないと思うな、ここに。

【将来の夢】

ここを出たら、自分がやってた仕事に戻ります。……入ったのはさ、就職探すためでしょ。……でもおれ、……行けるから、おれ、探す必要ないんだよね。……おれ、〇〇(以前の職業の名前)やる。……だからここにいる必要ないんだよね、はっきり言えば。……[グループホーム……行きたいですか。] 行きたくない。(将来の夢は) 建築会社の社長になりたい。

このように身体障害のような可視性の障害の場合、障害を認識せざるを得ないのに比べて、Aさん、Bさんのような軽度知的障害の場合には、障害を認識していないことがわかる。さらに障害に対する社会からの抑圧はいじめとして表現されることが多い。Aさんの語りにいじめはみられないが、Bさんはいじめにあい、ボクシングを習って対抗している。

Bさん：強くなりたかった。……いじめられてたから。小3から中3までいじめられた。5対1で殴られ、蹴られた。強くなるためにボクシングを習った。……卒業後も家までつけてきた……

つまり暴力には暴力という戦略を用いるが、卒業後もいじめは終わらず解決に至らなかった。Bさんは、いじめられる明確な原因が探せなかったのではないだろうか。

一方で「軽度身体障害者は健常者を『自分とは違う他者』として認識し、障害のある自己を否定的にみるようになる」（太田 2007）が対処するための戦略を立てている。例えば「障害を理由に『意地悪』をした周囲の不良学生を『見返す』ために『勉強』を武器にした」（太田 2007）例があげられている。

「あんた、ええのう。体不自由なばっかりに先生に可愛がってもらって」「ひいきされてるんとちゃう？」そういうふうに言われるのよね。……私のほうも、あいつらに勝てるのは勉強しかない、って思うやん。……見返しちゃうわーってぐらいの気持ちで勉強しよーって。（太田 2007）

このように、身体障害のある人たちはいじめの原因は、障害であると確信し、対処する戦略を考えている。それに対し軽度知的障害のある人の場合、障害を認識していないため、そこから生じる社会からの抑圧への戦略を考えることが困難なのである。

②学校教育を終了してからの出来事

次に家族・本人と社会との障害の認識のずれは、社会にでる就職時に現れるのが一般的である。しかしこの時、AさんとBさんの家族は2人を家族の中に囲い込んで庇護し、本人と社会との関係は希薄になっていった。

Aさん：高校卒業してからは、……家で、手伝いしてました。……母と料理したりしてました。……ずっとうちにいましたね。（高校卒業してから）20年ですね。

Bさん：卒業してすぐ、1カ月もしないうちに〇〇始めた。……1カ月に18万もらってた。……おやじがやった。……だから親は……いい就職とかね、ないから、それやったほうがいいんじゃないかねかってことでやり始めました。

Aさんは家事を、Bさんは家業を手伝うことで、働き始めている。家族に守られ、社会から

の抑圧を経験することもなく、平穏な日々が20年以上続く。

③入所のきっかけ

しかし親の入院や死亡により、そのような生活は維持できなくなり、本人たちの意志に反する形で施設入所となっている。

Aさん：……何か、父が、難しいからと言って、ここへ入れて、入ったんです。

Bさん：おやじが亡くなった後、仕事してなかったの。……だから……入れられたんじゃない。

平穏な日々は、家族形態の変化によって一転する。仕事、生活のほとんどを家族と共にしていただけに、本人たちにとっては大きな生活の変化であっただろう。

④現在の生活

現在の生活について、入所5年目のAさんは、仕事については「楽しい」と語るが、「父と母と三人で暮らしていたかった」という想いが強い。またBさんは入所前に「入れなかった」（就職できなかった）経験を話しながら、「働く場所見つかってるんだから、何でもまだいんのかなと思って」と入所1年以上たっても現実を受け止められていない。

Aさん：一人になって、やっぱり、寂しいですね、夜は。[……お仕事は?] 楽しいです。[Aさん、幸せそうですね] ……あんまり幸せではありませんけど[それはどうして?] ここ来たからです。……暮らしていたかったですね。父と母と三人で。

Bさん：[……家におられた時は（お母さんは）働きなさいとかおっしゃったの?] うん。だから……アルバイトの本とか買って見てたけどね。[面接に行ったりは?] しましたよ。工場とかね。……目が悪いからね、入れなかったの。

……働く場所見つかってるんだから、何でもまだいんのかなと思って。……おれ、いる必要はないと思うな、ここに。

⑤自分の障害について

2人は自分の障害について次のように語っている。

Aさん：……父に言われたんですね。ここの人にも、言われましたよ。……障害、知的がちょっとあるって言われました。……びっくりしました。……今でも少し悲しいです。

Bさん：[障害をもってるっていうふうに思われますか] 思わない。……だっておれ、何ももってないもん。……普通のそら辺の人とかとね、職員と変わらないもん。

Aさんの愛の手帳をみたところ、20歳で取得されており施設入所時に更新されていたが、A

さんは施設入所時に取得したと認識していた。つまり親はAさんが20歳の時には障害を認識し、福祉サービスを受けることを半ば予期していたが、そのことをAさんとは話してこなかった。Bさんは障害について誰とも話し合ってこなかったのである。

このように、軽度知的障害は不可視性という特性のため、本人は、障害認識が困難で、それゆえ障害認識に基づいて社会からの抑圧への戦略を立てることも困難なのである。さらに障害について誰とも話した経験もなく、家族に囲われ社会からの抑圧を経験しないまま、突然施設に入所させられても現実を受け止められないのである。

(2)自分の知的障害を認識していたCさん

これに対し、Cさんの語りをみていく。Cさんは、小学校を3回転校、5年から特別支援学級に変わり、高卒後、専門学校に入学するが退学し、入院、他施設を経て、X施設に入所している（表-4）。

Cさんは、3回も地域の小学校を転校させられた原因について明確に語っている。

僕に知的障害があることを、……学校側に言わなかったみたい……おばあちゃんの話によると。……隠して……入れたから、問題になって「それは誰から聞いたの？」おばあちゃんから聞きましたね。……よく言っていましたね。……ちっちゃいころから現在に至るまで。

その後、自ら希望して特別支援学級に変わっている。

勉強がわかんなくて、……配慮してもらったけどやっぱり無理だった……4年生の最後の時に……身障クラスに移りますっていうふうに言って……

その後、中学の特別支援学級は「小学校とは比べ者にならないほどの厳しさで……学校行くとパニック発作が必ず起きた」ぐらい不適應だった。高校を卒業後、専門学校に入学するが単位がとれず退学し、そのストレスで入院し、他施設入所を経て、X施設に入所している。このようにさまざまな社会からの抑圧や差別に出会うが、いつも主治医と祖母が自分を理解してくれる人として一緒にいると実感している。

うまくやってこれたのは、……主治医のY先生がもう小学校の時からずっと見てくれた……僕の話聞いてくれるし……

理解してくれるのは……もうずっとおばあちゃんやY先生。

そのようなCさんは、自分の障害について、どのように述べているのだろうか。

僕も中学校になってから先生に……あなた知的障害があるんだよって言われて、……中学校3年の時に愛の手帳を取得した……嫌ではなかったですね。……

日中活動の場に何と、納涼祭のチケットを切っていた。礼儀正しくてもしっかり話ができるという印象。

〔幼児期〕

〇〇保育園。先生が優しくった。……ちょっと保育園のことはあんまり覚えてないです。

〔小学校〕

普通学級だったんですけど……何か先生が合わないっていうふうに……お母さんとお父さんが何か言ったみたい……「覚えてる？」いや覚えてるというか、なぜか転校するようになったっていうのは覚えてるんですけど。……〔親は〕どんなふうに説明してくれたのかな？ 違う学校に行くよって。……ここの学校でやってみてっていうふうに言われた……ずっと6年間〇〇小にのいるのかなと思ったんだけど……引っ越しを伴う転校じゃなかったんで。……僕に知的障害があることを……親とおばあちゃん知ってたみたいなんですけど、……学校側に言わなかったみたい……おばあちゃんの話によると……隠して……入れたから問題になって……〔誰から聞いたの？〕おばあちゃんから聞きましたね。……よく言っていましたね。……ちっちゃいころから現在に至るまで……いじめとかはないんですけど、……勉強がわかんなくて、……どうしていいかわかんない……いろいろ配慮してもらったけどやっぱり無理だった。4年生の最後の時に……身障クラスに移りますっていうふうに言って。身障クラスで過ごした2年間は楽しかったです。

〔中学〕

〇〇中学校……身障学級……入ってみたら、もう小学校とは比べ物にならないほどの厳しさで、名前は呼び捨てされるは、……もう行きたくないと思うぐらいな感じだった……学校行くとパニック発作が必ず起きたり……怖い先生だったり……

〔高校〕

……今度〇〇養護学校に入ったんですけど、……環境の変化で……また発作が起きた……溶け込めない友達がいるストレス感じて……学生時代にうまくやってこれたのは、……主治医のY先生がもう小学校の時からずっと見てくれた……僕の話聞いてくれるし、それに対するアドバイスもくれる……こういうときはこうしなさいよとか、これがあったら逃げなさいよとか、……我慢しないでいいんだよって、何かあったらすぐ先生に言うことっていうふうに言われて。

〔高卒後〕

専門学校へ入学するが退学。そのストレスで半年入院。退院後、就労目的で半年契約で他の施設に入所。しかし半年で就職は決まらなかったのてX入所施設に入所。（語りは省略）

〔入所のきっかけ〕

（前の施設職員に）X施設に……入りませんかと言われた。……退所の前に、……見学させてもらって……前の施設よりきれいな感じ……全室個室だし、……携帯もパソコンも自分の好きなように使えるんで。……まあよかったなと思って。

〔現在の生活〕

（日中活動は）……パチンコ解体とか事務仕事……書類を適切なサイズに切ったり、印刷機使ったり、コピー機を使ったり。（この生活は）……やだなと思う人とかもいますけれど、それ以外については、まあみんな話せますし、大丈夫だと……（帰省した時はストレス発散のため）家からカラオケ店まで1人で行って、1人で3時間歌って帰ってくる……

〔自分の障害について〕

理解してくれるのはおばあちゃんだったんですけど……もうずっとおばあちゃんやY先生と……家族のサポートがあったりして過ごしたんで。……僕も中学校になってから先生に言われて、あなた知的障害があるんだよって言われて、……中学校3年の時に「愛の手帳」を取得したんですよ。〔嫌でしたか？〕まあ嫌ではなかったですね。思ったより障害だったんだなと思って。……理由が分かってよかったって感じ……〔お母さんとは障害について、どんなふうにしたのかな？〕やっぱり勉強できなかったり、上着1つつけられなかったりとかそういうのは全部その障害のことなんだよって言われて、……僕も……勉強ができないとか、うまく人と付き合うのが苦手だったっていうのが、何の原因なのか分からない原因不明の病気かなと思っちゃってたんですよ。それで「愛の手帳」が発給されてから、僕は知的障害があるんだって、これが原因だったんだっていうような感じだったんですよ。……〔Cさんにとって知的障害の人ってどういう人っていうイメージがありますか？〕……僕にとってそれは、ひどい人で話せない人がいるっていうのがそういう感じかなと思って……〔ご自分はどう思いますか？〕僕もやっぱりありますね……普通の人とかに言われると、「わかってること聞かないでよ」とかっていうようなこととかですけど、僕はわからないんですよっていうことがあったりとかするんで。……（でも）知的障害でつらかったっていうよりは……うつ病だったりパニック障害だったりになってつらいっていうのが、……普通の人だったらストレスがうまく発散できるけれど……ストレスの発散の方法がうまくできないとかいうのがあって……その結果うつ病、パニック障害になったっていう感じでドクターも言っていたので。

〔将来の夢〕

最近になって女の子1人が就職したっていうのを聞いて、……だから僕も来年ぐらいにもし就職できればして、大体会社に慣れて1年間ぐらいはここにいさせてもらって、……もうここを卒業して家から仕事場に通うっていうのが夢ですね。……グループホームで集団生活はもうちょっとストレス感じて……もうこれ以上集団生活はやなで、もう自宅に戻りたいって気持ち。

「お母さんとは障害について、どんなふうにしたのかな？」やっぱり勉強できなかったり、上着1つつけられなかったりとかそういうのは全部その障害のことなんだよって言われて、……

これらの語りから、Cさんは、祖母、主治医を始め、中学校の教師、母親とも障害について何度も話し合っていることがわかる。

僕も……勉強ができないとか、うまく人と付き合うのが苦手だったっていうのが、何の原因なのかがわからない原因不明の病気かなと思っちゃってたんですよ。それで、愛の手帳が発給されてから、あ、僕は知的障害があるんだって、これが原因だったんだっていうような感じだったんですよ

この語りから、Cさんは愛の手帳の取得を「僕は知的障害があるんだって、これが原因だったんだ」と語り、原因が明確になったととらえていることがわかる。

「Cさんにとって知的障害の人ってどういう人っていうイメージがありますか？」……ひどい人で話せない人がいる……そういう感じかなと思ったんです。[ご自分はどう思いますか？] 僕もやっぱりありますね……普通の人とかに言われると、「わかってること聞かないでよ」とかっていうようなこととかですけど、僕は「わからないんですよ」っていうことがあったりとかする……（でも）知的障害でつらかったっていうよりかは……うつ病だったりパニック障害だったりになってつらいっていうのが、……ストレスの発散の方法がうまくできないとかいうのがあって……

（帰省した時はストレス発散のために）家からカラオケ店まで1人で行って、1人で3時間歌って帰ってくる……

Cさんは「普通の人」という言葉を何度も使い、健常者と自分を区別し、自分の障害については、「普通の人とかに言われると、『わかってること聞かないでよ』とかっていうようなこととかですけど、僕は『わからないんですよ』っていうことがあったりとかする」と説明している。そして「知的障害でつらかったっていうよりか……ストレスの発散の方法がうまくできない」ことが悩みで、現在もパニック障害の発作があるが、「カラオケ店まで1人で行って、……3時間歌って」ストレスを発散している。

これらの語りから、障害について話し合い、共に考えることで、障害を認識し、そこからくる症状（ここではストレス）への対処法を見つけていることがわかる。

(3)軽度知的障害の不可視性が障害の自己認識の形成にもたらす影響

3名の語りから障害の不可視性が障害の自己認識の形成にもたらす影響について述べる。

①障害の不可視性

可視性の身体障害ある人の場合は、他者と比較し、自分の体との違いを本人のみで認識し、そのような障害認識に基づいて社会からの抑圧に対処する効果的な戦略を立てることができる。しかし軽度知的障害は、不可視性の障害であるため、本人のみで障害を認識していくことは困難である。そのためそこから生じる社会からの抑圧に対して効果的な戦略を立てることも困難になる。

②障害の不可視性による親の態度

〈障害についての話し合いの欠如〉

軽度知的障害の不可視性は親の態度にも影響をしていた。Aさんの親はAさんが20歳の時には障害を認識していたが、施設入所まで20年以上Aさんと話し合ってこなかった。Bさんの親の認識は不明だが、施設入所にあたっても障害について話をしていない。親たちは、子どもの知的障害を認識していても、不可視性ゆえに障害について本人と話し合っておらず、そのことは本人の障害認識の形成を困難にしていた。

〈家族の中への囲い込み、社会との関係の希薄化〉

Aさん、Bさんの親は、高卒後、本人を家族の中に囲い込んで、家事や家業をさせ、社会との関係を希薄化するという逆方向の戦略をとっていた。そのため2人は社会からの抑圧を経験せず、安定した20年を過ごすことができたが、そのことが本人の障害認識の形成をますます困難にしていた。その後、2人は家族形態の変化によって、施設入所となるが、障害認識も戦略もないまま、社会からの抑圧に直面することになる。

③障害の不可視性にも拘らず、障害を含めて理解してくれる他者の存在

Cさんの親もCさんの障害を受け止めることができず、小学校を3回も転校させている。しかしCさんには小学校のころから、祖母、主治医という存在があった。2人は障害の不可視性にも拘らず、積極的にCさんと障害について話し、どのように生きていけばよいのか共に考えている。そのことが後に母親の意識も変化させている。Cさんは社会からの抑圧に直面しながらも「ずっとおばあちゃんやY先生と……家族のサポートがあ（る）」という自己認識をもつに至っている。将来の夢について「ここを卒業して家から仕事場に通うっていうのが夢」だと語った。知的障害についてあえて本人と話し合い、障害を含めて理解してくれる他者の存在が、障害の自己認識を形成させ、障害を含めた自分でもよいという自己認識を育てていた。

4. まとめ

一般に、軽度知的障害は、身体障害に比べ、不可視性の障害であり、このため本人の障害認識の形成は困難であり、また障害認識に基づいて社会からの抑圧に対処する戦略も立てにくい。障害の不可視性は、親の態度にも影響を与え、本人と障害について話さず、家族に囲い込んで庇護し、社会との関係を希薄にするという逆方向の戦略をとることを可能にする。この結果、当面本人や親は社会からの抑圧に直面しないですむが、他方、本人の障害認識はますます形成されにくくなる。

しかし、このような親の戦略は、近代核家族においては、よほど経済的に恵まれていない限

り長続きしにくい。親の入院・死亡を契機として福祉サービスを利用せざるを得なくなる公算が高いが、その時、本人は、障害認識もなく戦略もないまま、社会からの抑圧に直面することになる。

逆に、軽度知的障害の不可視性にもかかわらず、親や周囲の者が本人の障害認識を促し、障害を含めた自分でもよいのだという自己認識や社会からの抑圧へ対処する戦略を育てていれば、親の庇護がなくなっても、福祉サービスとあいまって、社会の中で生きる将来の夢を語るができるようになるのである。

本論文から導き出される以上の結論は、障害の可視性・不可視性と本人や親の障害認識、さらには社会からの抑圧へ対処する戦略の選択との間の緊密な関係性を示しているものと思われる。

なお、本研究は、平成22年度科学研究費補助金/基盤研究(C)/22530661「知的障害のある人の語りによる自己認識の形成過程に関する研究」によるものである。

引用文献

- Goffman, E. (1963) STIGMA, Prentice-Hall, Inc.(= 2001, 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房.)
- 中田洋二郎 (2002) 『子どもの障害をどう受容するか』 大月書店.
- 能智正博 (2000) 「頭部外傷者の〈物語〉/頭部外傷者という〈物語〉」やまだようこ編『人生を物語る』ミネルヴァ書房, 185-214.
- 太田啓子 (2007) 「『軽度』身体障害者のライフサイクルにおける障害観の変容」『障害学研究』3, 89-115.
- 杉野昭博 (2007) 『障害学 理論形成と射程』 東京大学出版.
- 杉田穂子 (2011) 「知的障害のある人のディスアビリティ経験と自己評価」『社会福祉学』52(2), 54-66.

Invisibility and Self-recognition of Intellectual Impairment: Based on Life Stories Told by People with Intellectual Impairment

SUGITA Yasuko

This paper, based on life stories told by people with mild intellectual impairments, discusses how the relative invisibility of their impairments affects self-recognition of the impairments.

Compared with physical ones, mild intellectual impairments, being less visible, tend to hinder formation of self-recognition of the impairments and appropriate strategies against social disabilities. Parents of these people tend to be affected as well. The invisibility of their mild intellectual impairments allows their parents to adopt a reverse strategy of enclosing them in the family, reducing their social ties to a minimum and not talking about the impairment with them. As long as the strategy holds, they and their parents need not suffer social disabilities. With their parents hospitalized or dead, however, they are forced suddenly to face social disabilities alone without self-recognition or strategy.

On the other hand, when people with mild intellectual impairments have someone willing to discuss the impairment and the way to live with it, they tend to develop self-recognition of their impairments and their own strategy.

This paper concludes with a suggestion of a close relationship between the visibility/invisibility of impairment and recognition of impairments as well as choice of strategy to fight the social disabilities.

Keywords: people with intellectual impairment, life stories, self-recognition of impairment, social model, invisibility of impairments
